

ウィトゲンシュタイン「心理学の哲学」最初期の思考

菅崎 香乃 (Yoshino Sugasaki)

筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程

本提題では、「心理学の哲学」が本格化する直前のウィトゲンシュタインの思考に注目する。それによって確認されるのは、「心理学の哲学」、少なくともその最初期を牽引したひとつのモチーフである。

『哲学探究』第Ⅰ部のおおむね後半部から第Ⅱ部までの一群の考察が「心理学の哲学」と呼び慣らわされてはいるものの、そこでウィトゲンシュタインがどのような問いの元で、何を考察したのかといったことさえ、判明とは言いがたい。それは、感覚や知覚、感情、そして「意志する」や「思いだす」「考える」等の分析、あるいは夢や熟知性、二次的意味といった興味深い具体例、さらには概念形成や心理学に関するコメントなど、広汎で雑多な考察がそこに含まれるにもかかわらず、それらを貫く主題が明示されないことによる。あるいは、一貫した関心などはそもそもなく、ただ「こころ」にまつわる興味深い事柄を並べた雑記録が書かれたにすぎないということなのか。

このような疑問に対して、この時期のウィトゲンシュタインは「心理的概念」の分析に着手したのだという説明は、それら雑多な考察の最大公約数を与えてはくれる。しかし、それだけで問題が片付くわけではない。というのも、一番の問題は、「心理学の哲学」の総括と言える『哲学探究』第Ⅱ部でもっとも紙幅を割かれているのが、アスペクトと意味の体験という、心理的概念全体を見わたせばあまりにも特殊な事例だからである。ここにはなにか別の関心があったと想定する方が、自然ではなからうか。

これに解答を与えるための手掛りが、「心理学の哲学」の最初期の思考にあるというのが、提題者の見通しである。『哲学探究』から「心理学の哲学」へと移行していく時期に書かれた手書き原稿 (MS130)、本提題ではとくに、その中盤を詳細に検討する。

MS130において「心理学の哲学」が本格化するのは、意味体験の集中的な考察からと言える。しかし、それに先立って、ウィトゲンシュタインは、自分の念頭にあるさまざまな事柄を列挙するような記載を残している。それらを検討すると、その多くが、最初に示されるある事例の変奏であることがわかる。そのなかには、アスペクトと意味の体験も含まれる。本提題では、この基本となるモチーフの存在を明らかにし、これがその後の展開にも影響を与えていることを示したい。それによって、ウィトゲンシュタインの「心理学の哲学」を理解するための新たな視点の獲得が期待される。